

# ひと筆

## 鍵盤の夢を追い求めて



兵庫県弁護士会会員

亀井 尚也

Kamei, Hisaya

### 30年間のブランクを経て

本稿で愛知県弁護士会の江本真理会員がピアノへの想いをつづた「唄いつづけるために」を読み、涙が頬を伝ったのは6年前だった。同じ想いを抱く者として、江本さんに手紙を書き、演奏も聴きに行き、私の演奏も聴いてもらった。

弁護士業務をこなしつつ、法科大学院の専任教員として睡眠を削る生活が一息ついたのは、2006年の秋だった。高校まで続けたピアノを弾かなくなって30年たっていた。子供に買ったピアノを時々鳴らしてもうまく弾けるはずもなく、諦めかけていた。ある日、このままピアノを弾かずに人生を終えるのかと自問自答した。近所にプロを育てている優れた先生がいるのはわかっていた。迷った末に門をたたいた。

先生は「いよいよですね。」と歓迎してくれ、その日から魂のこもるレッスンが始まった。ピアノで唄うとはどういうことか、どんな音が美しいのか、そのための腕と指をどう作るのか、曲をどうとらえてどう表現するのか等、目から鱗の連続だった。アップライトピアノでは物足りず、カプセルのような防音室とグランドピアノを買い、帰宅後深夜まで密室で練習に励むようになった。

人前で弾けるまで3年は発表会に出ませんと言っていたが、先生の教えは当初から「ディミヌエンド（音をだんだん弱めていくこと）しているつもりでも、最後の音まで自分で聴き届けないと人には伝わりませんよ。」「こう弾くのが説得的ですよ。」など、人に聴いてもらう前提になっていた。私たちの起案と同じだ。先生のアドバイスを最大限引き出すには、ステージを目標にするしかないと決心し、半年後に発表会に出た。ブラームスのラプソディという曲だった。30年ぶりの舞台を大勢の友人に宣伝してしまったため、当日は不安と緊張が最高潮に達した。スポットライトに浮かぶピアノからホールの空間に放たれる自分の音を一心に確かめながら必死で弾いた。駆けつけてくださった高校までの恩師とロビーで再会し、抱き合って泣いた。

# ひと筆

## 初のリサイタル

それからは、上達するにつれ、美しいものに触れた時の震えるような感動を人に伝えたいとの思いが高じるようになった。ふとした折、先生が「その思いを実現するにはリサイタルを開いてはどうですか？発表会を見ると、集客能力もあるし。」と冗談めかして言った。私の心境はすっかり見抜かれていた。3年間は発表会に出ないはずの私が、無謀にも、3年後にホールでリサイタルまですることとなった。

リサイタルは、発表会で10分ほど弾くのととはわけが違う。1時間以上何曲も演奏するので、どの作品も当日ピークが来るように仕上げないといけない。仕事をしながら準備するので、約2年がかりで計画的に進めないといけないし、練習時間の捻出も必要だ。好きなアルコールも飲み会以外は辞めた。毎回約3時間のレッスンをしてくれる先生の期待に応えないわけにいかない。褒められることは滅多にない。でもそれは先生の本気度の表れだ。

初興行はちごんまりしたものだだったが、プログラムはベートーヴェン・シューベルト・グリーグ等と盛りだくさんで、小さな失敗もあったが、知人の温かい視線に包まれ、何とか成功した。何人もが涙を流してくれた。先生は私に、「魂の演奏で天国に上る階段を一步一步上ってほしい。」と神がかり的な挨拶までしてくれた。

## それから

2年後、プロの演奏会も行われる兵庫県立芸術文化センター小ホールで、バッハ・ベートーヴェン・ラフマニノフ等、全て私の選曲で臨んだ。この時が私の一番の試練だった。欲が出た私は、2年に一度はリサイタルをやりたくなった。400人規模のホールなので、親戚・友人・弁護士仲間・依頼者・法科大学院関係・音楽仲間など、あらゆるルートで宣伝し、ほぼ満席になった。でも、義理で1度は足を運んでもらえても、また聴きたいと思う演奏をしなければ、次は来てくれない。プレッシャーのせいで痩せた。本番では案の定危ない場面も多かったが、夢のようなスタインウェイの音とホールの幻想的な響きに助けられ、次第に集中力と落ち着きを取り戻し、多くの人から感動した、いい日だったというメールをもらった。

私の演奏はまだまだうまくないが、気持ちだけは込めたと信じている。リサイタル直後、先生に、きついでプログラムを少し軽くした方がよいでしょうかと尋ねてみた。先生は確信に満ちたように、「いや、この曲を弾けたら死んでもよいと思うものをプログラムにすべきです。」と言われた。「あなたはそうしてきたはずでしょう？」とつぶやくように。私の迷いは吹っ切れた。

その2年後に同じ規模のリサイタルを開き、2015年には、プロのオーケストラと

# ひと筆

ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番を協演する夢も実現した。毎回足を運んでくれる方が少しずつ増えたのが、かけがえのない支えだ。来年は、ショパンをメインにしたリサイタルを予定している。曲目から察されるように、最も敬愛する作曲家はベートーヴェンだ。音楽を貫く強靱な精神性が私の目標とするところだ。

## 9年間を振り返って

色々な経験を経て、最近ようやく音楽がわかってきた気がする。人が泣くほど感動するのは、音のつながりと重なりがあるからだと思う。音のつながりは言葉と同じで、歓喜や悲哀、夢と希望、絶望や苦悩、叫び、あえぎといったメッセージだ。音の重なりはハーモニーで、えも言われぬ美しさや、痛み・ねじれ・緊迫と解決・安堵などが、人の心を揺さぶる。ピアノは歌のようなセリフも、弦楽器や管楽器のような音の伸びもなく、鍵盤を打った瞬間から音が消えていくはかない楽器なので、音がつらなる響きと表現力を獲得するのは難しい。その代わりに、一度に多くの音を出せるので、ハーモニーを一人で作ることができる。10本の指で合奏し真中で指揮をしているような喜びがある。深い主張のある音楽を創ろうと格闘する毎日だけれど、どんな難曲でもこの曲をこう弾けたら死んでもよいと思って選んだ以上、つらくはない。苦しいのは、震えるほど弾きたかった曲を繰り返し練習するうちに、本当にこの曲を弾きたかったのかと迷いが生じるときだ。迷いは演奏に必ず現れ、人の心に何も伝わらなくなる。自分の発する音色に必死で耳を傾け、原点に戻ってものがき、乗り越えるしかない。

もう一つの収穫は、本番が自分を成長させることだ。自らのリサイタルを軸にしつつも、アマチュアも出られるコンクールが結構あるので、専門の人に聴いてもらう機会だと思い、積極的に出ている。それにしても、ステージで何度演奏しても、心臓にひやっと風が吹き込むあの緊張感はどうしようもない。舞台袖で待ちながら、不安が押し寄せてきては、「お前は無難な演奏をしにここに来たのか？自分の表現を聴いてもらいに来たはずだろう？」との自問自答の繰り返しだ。

本番のあるわくわく人生こそ幸せなはずだ、と言い聞かせつつ悪戦苦闘を続けている。



2009年の初リサイタル